

平成 26 年度 新任助教研究助成 採択者

〔研究者〕	
	氏名 立花 美緒 (たちばな みお) 所属 教育施設環境研究センター 職名 助教
〔タイトル〕	
諸外国の学校建築における教室の構成に関する研究	
〔研究の概要〕	
<p>近年、欧米諸国や日本では豊かな社会の創設や経済発展のために、次世代を担う子どもの教育が重要課題となっている。フィンランド、イギリス、オランダなど日本よりも教育改革が先行した欧米諸国においては、教育体系や学校体系が多様化し、さまざまな学校建築の取組がなされている。10 年間に渡りこども、教師、保護者、地域の住民が建築家、教育専門家と一緒に作った環境共生型の学校や、ロフトと水廻りを持つ生活空間としての教室ユニット、教材としてのランドスケープの整備などといったように、「教師が教える場」から、「生徒が学ぶ場」へという教育理念のもと、子どもの個人差に対応した多様な学校施設の取組が行われている。一方で日本の小中学校では 1949 年の RC 造校舎標準設計以降、1970 年代～90 年代中頃にオープンスペースの導入を経て、1990 年代末から学校施設や教室の画一化が指摘されている。教育先進国の取組みを分析し、子どもの教育効果や地域社会の教育環境の向上を図る体系的な学校計画の研究を行うことは、新世代に向けた学校建築の再編成をおこなう上で重要であると考えている。</p>	
〔オリジナリティ〕	
<p>建築分野における諸外国の学校計画に関する研究は少数の事例研究が多い。比較できる数の事例を対象とした体系的な研究は少なく、先駆的研究として位置づけられる。また、現状の実態解析にとどまらず、建築計画学、建築歴史・意匠学、環境心理学といった学際的な視点をもって学校建築のあり方を問う点に学術的な特色がある。</p>	
〔期待される成果〕	
<p>諸外国では教育改革が日本に先行して行われており、多様な少人数指導・少人数学級・地域社会と連携した小規模校の建築計画及び室内外の構成を調査・検討することができると予想し、体系的な知識ベースを築くことが本研究の目標とする結果である。グローバル化及び少子化する日本社会における、より柔軟な学校建築のあり方を提示し、地方自治体及び日本全国の学校建築計画に十分に適用しうる点に本研究の意義がある。</p>	